

4.16 学習による行動

この節の執筆が難しいのは動物行動学と動物心理学と実践的な調教方法の領域が合わさっているからです。上記の 3 つのいずれも信奉者がいて、専門用語があり、他のアプローチへの懐疑主義があります。動物行動学と動物心理学と実践的な調教方法のそれぞれが研究されるべき問題をたてることに貢献していますが、各領域だけでは狭すぎるか浅すぎる見解しか提供できません。とても複雑で相互に関係があり、部分的にしか理解されていないテーマの簡略的な説明をします。このテーマは科学的な検証の影響を受けません。

私の見解では、学習には 2 つの面があります。それは不随意的学習と自発的な学習です。不随意的学習では不随意的反応または反応の欠乏が神経系の自動的無意識の部位を通じて作られます。訓練された行動は、思考を伴わず素早く自動的です。馴化、古典的条件付けおよび強化オペラント条件付け、関連づけ、トラウマによる学習が含まれます。

自発的な学習が生み出すのは意識的な自発的反応です。この反応は非自動的で即座に起きる必要はありません。洞察による学習と経験が含まれます。知性とは単純に言えば学習能力です。知性の産物が経験であり経験は知恵です。

5 章では実践的な調教の細部と猛禽を動機づけることに触れます。この 4 章では行動および学習の裏にある理論と方針を説明しています。これらの方針が理解されれば現実的な問題の解決策が明らかになるだけでなく、調教の全過程が効果的になり効率化されます。すると以前に比べてずっと少ない努力で済みます。

4.17 じゅんか 馴化

馴化とは猛禽がある刺激に反応しなくなるようにそれにさらし続けることです。すなわち猛禽を物事に慣れさせることです。これが伝統的な猛禽の馴らし

方でした。まず誰かが昼夜を通して猛禽を据えます。すると猛禽は心身ともに疲れ切って反応しなくなります。そして以前は反応していた刺激が近くにあってもこぶしの上で静かにできるようになるのです。

馴化には大きな問題があります。条件付けと同じくその効果は弱まっていくのです。そのため調教師の仕事はいつまでも続くことになります。たとえばエリザベス朝の時代の鷹匠は朝にオオタカをフライトさせる前、タカが三度羽振いをするまで馴らしたものです。野生から捕獲したタカ類の調教においては努力のほとんどが馴化に向けられます。基本的にはタカが嫌がる刺激（人間や機械やフードなど）に反応しなくなるまで頻繁に繰り返しさらします。タカは反応しないので報酬は与えられません。

猛禽をウェザリングする主な理由は、マニングの維持または馴化のためです。しかし鷹小屋の窓が注意深く位置されていれば、ウェザリングのリスクと欠点ぬきにタカを馴らした状態に保てます。

馴化はオオタカに白いフェレットを無視するよう教えるときに役立ちます。輸送箱に入ったフェレットを何日か見せると、オオタカはフェレットを気にしなくなります。何かを嫌がってグローブからぶらさがってしまうことも似たような馴化を用いて矯正できます。私の年取ったオオタカが神経質に嫌っていたのはバケツや水浴び用の桶やフェレットの輸送箱などのプラスチック容器でした。オオタカがトヤの間これらの容器を鷹小屋の天井からゴムひもでつるし、風で動くようにしたところ症状がなくなりました。神経症はトラウマによる学習（4章18節参照）が原因のことが多く、馴化による治療は長期間効果がありほぼ永遠のように思えます。日常的なストレス刺激に対しては馴化の効果がより長く続くでしょう。

意図せずして馴化を誤って用いた例を紹介します。友人から電話がありハヤブサがルアーを無視する理由を尋ねられました。教科書に書かれている通り、彼は餌をルアーに結び付け、ブロックにつながれたハヤブサの近くに投げ落としました。ハヤブサはルアーに飛び降り餌を食べ、ルアーに餌が残っていないことを確かめるとブロックに再び登りました。彼は仕事に行っている間ルアー

をそこへ置きっぱなしにしたのです。次の日またその次の日もハヤブサはルアーを無視し拳にだけ飛んできました。ファルコナーはハヤブサがルアーを無視するよう馴化してしまったのです。治療法は異なる外見の新しいルアーを用いて訓練をやり直し、ハヤブサがルアーの餌を食べ終えたらすぐに一口大の餌で拳に乗せることでした。

一般的には、馴化は年老いた鳥より若鳥に対して効果があり、より長続きします。若い猛禽は習慣を発達させる途中にあります。年老いた猛禽は犬や馬や人間もそうであるように介入できる余地が狭まります。猟期が終わりタカをトヤに入れるために馴化が中止されると、次の馴化はより簡単に達成されます。猛禽のマニング（馴らし）の必要性は猟期を重ねるごとに少しずつ減少します。

ある種の刺激への馴化は、似たようなほかの刺激に対する反応も減らします。たとえば白いフェレットを無視するオオタカは、白いウサギも無視するかもしれません。一方でオオタカは差別意識が強く、ある猟犬とは仲良く狩りができても同種のほかの犬には大きなストレスを感じることがあります。

正の強化を用いることで馴化のスピードを速め効果を強調することが多々あります。例としてフード嫌いの猛禽に対して餌をフードの中に入れたり、マニング（馴らし）のとき拳に据えた猛禽に歩きながら餌を与えることがあります。猛禽が拳の上から逃げようとしないう、細心の注意を払う必要があります。さもないと猛禽は拳を不愉快な経験と結び付けより暴れるようになるでしょう。この期間に最も重要なことは、ファルコナーの注意深さであって、忍耐力ではありません。

※本原稿は翻訳作業中のもので、完成版とは異なる部分もございます。あらかじめご了承ください。